

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水の音が変わった日

神奈川県 横浜市立樽町中学校 二年 背黒 五希

私は水が好きだ。夏になると、水の中にいる時間が増える。市民プールで泳ぎ、毎年キャンプで道志川に入る。川の水は驚くほど冷たく、足を入れた瞬間、思わず声が出る。流れに身をゆだねると、体がすつと軽くなり、どこまでも運ばれていくような気がする。川の流れは、離れているときは雨のように聞こえ、遊んでいるときは、光や暑さ、セミの声にまぎれていった。息を止めて潜ると、外の音が遠のき、静かな世界になる。その中で目を開けると、川底にはニジマスやアユが泳ぎ、光がゆらゆらと揺れている。とてもきれいだ。何度も岩から飛び込み、流れに乗って笑う。水は、私にとって「楽しいもの」だった。

そんな私の水のイメージが大きく変わったのは、能登半島地震のときだ。母の実家がある金沢にいたとき、緊急地震速報の後、突然の大きな揺れがあった。家族で避難し、安全が確認されてから祖父の家に戻ると、しばらくして水が止まった。蛇口をひねっても、いつものような水の音はせず、水は出てこない。その静けさが、かえって不安を大きくした。

母と一緒にスーパーへ水を買に行ったが、棚には一本の水も残っていなかった。お茶やスポーツドリンク、ジュースは並んでいるのに、水だけがない。その光景を見たとき、水はただの飲み物ではないのだと気づいた。水は、飲むだけでなく、料理や手洗い、トイレなど、生活のすべてに関わっている。だからこそ真っ先に必要とされ、なくなってしまうのだ。家に戻っても、水は出ない。手を洗うことも、顔を洗うこともできない。トイレの水も気にしながら使う。たった一日でも、生活は大きく変わった。これまで何も考えずにしていた行動の一つ一つが、水に支えられていたことに気づいた。水がないということは、「不便」ではなく、「不安」だった。

道志川で感じていた水とは、まったく違うものだった。あの子の水は、流れに乗って遊ぶことのできる楽しい存在だった。しかしここで失

われた水は、生活を支えるために欠かせないものだった。同じ水なのに、こんなにも意味が違うのかと驚いた。それ以来、私は水の見方が変わった。普段の生活でも、水を意識するようになった。米のとき汁は捨てずにプランターの野菜の水やりに使う。お風呂は家族で続けて入り、残り湯も活用する。食器は水をためて洗い、流しっぱなしにしない。洗濯にはお風呂の残り湯を使う。特別なことではないけれど、水を「使う」というより、「無駄にしないように回す」感覚になった。考えてみると、水はいつも姿を変えながら、私たちのまわりを巡っている。道志川の水も、もとは空から降った雨だ。その水が川となって流れ、やがてどこかで人の生活を支える。私が使った水も、見えないところで誰かにつながっているのかもしれない。私は以前、水は「あるもの」だと思っていた。しかし今は違う。水は、ただそこにあるのではなく、私たちの暮らしを支えている存在だ。そしてそれは、自然の循環だけでなく、水を届ける仕組みや人の働きによって成り立っている。だからこそ、水が止まったとき、私たちは安心も一緒に失ってしまうのだ。水は暮らしを支えるしくみであり、私たちの命そのものだ。

水は色も形もなく、普段は意識することが少ない。でも、その見えないう存在が、私たちの生活を静かに支えている。道志川で感じた楽しさも、断水で感じた不安も、どちらも水がもたらしたものだ。その両方を知った今、私は水をただ消費するのではなく、大切に使い続けたいと思う。蛇口をひねれば水が出る。その当たり前の中に、安心がある。水とは、私たちの暮らしを支える「見えない安心」なのだ、私はあの日、はじめて知った。それ以来、水の音は、少し違って聞こえるようになった。